

No. J2101

第二次世界大戦後のラオスにおけるナショナリズムと連帯の可能性
：東南アジア、フランス植民地帝国を中心に

モンペリエ第三（ポール・ヴァレリー）大学
第 58 博士学院 博士後期課程
赤崎 眞耶

本研究は、第二次世界大戦後から独立達成までを中心に、ラオス人エリートがいかなる独立国家の建設、ナショナル・アイデンティティの形成を目指したのかを明らかにすることを目的とする。

2020 年度、2021 年度は新型コロナウイルス感染症流行の影響により、調査活動は大きな制約を受けた。筆者が活動拠点とするフランス国内・国外の移動がともに困難であったことから、計画していた調査の多くを延期せざるを得なかった。しかし、感染症の流行が比較的落ち着いている時期を見計らいながら、フランス国内と日本にて史資料調査、インタビュー調査を実施することができた。さらに、2022 年度には、追加での史資料調査をフランス国内と日本にて実施した。調査のために赴いたのは、フランス国立図書館（パリ）、軍事省国防史編纂部（ヴァンセンヌ）、外交史料館（ラ・クルヌーヴ）、海外領土公文書館（エクス・アン・プロヴァンス）、メモリアル平和記念館（カン）、国会図書館（東京）、防衛省防衛研究所史料室（東京）である。入手した史資料は、大きく①フランス植民地期のラオスにおける教育制度、現地人行政制度や、フランス人から見たラオスに対するまなざしを理解する手がかりとなる史資料、②植民地期末期から独立運動期にかけて、ラオス人エリートの国家建設やナショナル・アイデンティティ形成をめぐる考え・活動が記録された史資料の二種類に分けられる。また、パリにて第二次世界大戦後にフランスからの独立を目指したラオ・イサラ運動参加者の方にお話を伺うことができた。これは、公文書の分析のみでは見落とされがちな、ラオ・イサラ政府樹立とその活動に対する一般参加者の反応を知る貴重な機会となった。

研究成果は、ラオ・イサラ参加者の方とのパリでの公開イベント、英語での口頭発表、日本語での論文刊行など、様々な形で公表した。また、現在執筆中の博士論文では、植民地期におけるラオス人エリートの形成過程を詳述した上で、1920 年代から 1930 年代にかけてのラオス人エリートの行政参加や権利拡大に関する主張を分析し、さらに 1940 年代にエリートが国づくりへ参画していく様子を明らかにしている。